

II エピソード

ここで紹介するエピソードは、本園の教育活動の中で、「I 研究の概要」で挙げた2つの視点（「はつらつ」・「あんぜん」）が顕著に見られた場面を端的に抽出したものである。

幼児の姿をもとに、視点ごとに紹介しているが、1つのエピソードに両方の視点が混在しているものもあった。これは、2つの視点の定義の部分で述べたように、両視点が相関関係にあるからであり、それぞれの視点での育ちが他方の視点の育ちにも影響を与えているからである。

それぞれの視点での姿が分かりやすくなるよう、抽出にあたってこの混在を大幅に省略したが、エピソードによってはその特性上残しているものがあるので参考にして頂きたい。尚、エピソードの記号については、○：幼児の姿、▲：教師の援助、※：環境構成）とした。特に、視点での育ちを意図している教師の援助や環境構成は太字にし、右側欄に教師の読み取りを付け加えた。

～**視点①「はつらつ」:意欲的・主体的に体を動かして活動に取り組む姿勢**が見られたエピソード～

「僕もしていい？」

(4歳児 12月)

クラスでは戸外での鬼遊びが盛り上がっているのに、普段から室内遊びが多く、なかなか外に出たがらないH児。

※ H児が好きな、劇遊びで使った**オオカミの顔を雲梯に貼る。**

※ 鬼にオオカミ、逃げる方にヒツジの**かぶりものを準備する。**

○ (H児) 自ら進んで戸外に出て、「僕もしていい？」と鬼ごっこに加わる。



視点①

「なりきること」を前提に、イメージを具現化し、友達と共有できるような環境を教師が準備したことで、戸外で体を動かして遊ぶ意欲につながっている。

「せーのっ！！」

(4歳児 10月)

○ お店ごっこの準備をしているR男とH子。

○ 「せーのっ！！」の掛け声でタイミングを合わせ、1人では持てない段ボール箱を一緒に運んで店を作った。



視点①

教師が敢えて**手伝わぬこと**で見られた姿。

2人で持つときの持ち方、タイミング、段ボールの向きなどを考えながら、全身を使って運んでいる。

「リレーしよう!？」

(5歳児 10月)

※ 笛、コーン、椅子を準備しておく。

○ 運動場のトラックにコーンを並べ、かけっこ遊びが始まる。



※ さらに、フープ、バトンを準備する。

▲ チームが分かりやすくなるよう椅子の色を揃え、コースの両側に置く。

○ リレー遊びが始まる。

○ 自分たちで準備をして、遊び始める。



視点①

ただグルグル走ることやバトンを受け渡すことが楽しい。



それぞれの速さを競ったり勝負したりすることが楽しい。



自分たちで遊び始める。

「楽しさ」や「友達と一緒にすることのよさ」を味わえるような環境構成によって、幼児が自分たちで遊びを進めている。

竹馬コースでの姿

(5歳児 9月)

○ 写真のようなコースを作って、竹馬で進んでいたY男。

○ 横に渡した棒を越えられず、いつもひっかかっていた。

▲ 超えることができるS男の姿をY男に紹介する。



数日後、

○ 「先生、できたよ!」

▲ 「何でできるようになったと?」

○ 「S男君みたいに、後ろの足を、少し前で止めたらできたよ!」

視点①

失敗しても何度も繰り返し挑戦し、友達を参考にすることで後ろの足が引っかかるということに気づき、自分なりにコツをつかんでいる。

視点②

何度もひっかかった経験から、ひっかかっても竹馬から落ちずに遊んでいる。

「登れなかったけど登れたよ！」その①

(5歳児 6月)

- 樋を使って、高いところからゴルフボールを転がすコースを作って遊んでいたH男。
- ▲ より高いところから転がしたいと言う幼児たちと相談して、樋を木の枝に引っかける。
- (H男) ゴルフボールを握りしめて、木に登る。「先生、登れなかったけど登れたよ！！」



視点①

ゴルフボールを転がしたいという強い思いから、今までできなかった木登りに挑戦し、思わずできたことの喜びを味わっている。

「登れなかったけど登れたよ！」その②

(5歳児 6月)

- N美と一緒に登り棒に挑戦していたH男。
- (N美) 「真ん中の棒に紐が巻いてあるけん、それ使って登ったらいいよ。」
- (H男) N美に言われたやり方で登り、頂上部分にも立てるようになる。「登れなかったけど登れたよ！！」



視点①

「できるようになりたい！」という強い思いから、友達と一緒に登り棒に挑戦している。
登れた達成感を味わい、頂上に立つという難しいステップにも挑戦している。

この①と②の2つのエピソードは、どちらもH男の、同時期の姿である。両方の場面でH男は、今まで登れなかった高いところに登れるようになったことを喜んでいるが、「その①」では、“ゴルフボールを転がしたい”という思いが動機だったことに対して、「その②」では、“登り棒に登れるようになりたい”という思いが動機である。前者が無意識的であるのに対して、後者は意識的である。(cf. 「I研究の概要」 「3研究の内容」(3) 固定遊具と可動遊具への着目 p.5)

～視点②「あんぜん」：安全についての構えを身に付ける姿勢が見られたエピソード～

「みんなが楽しい方がいいやん！」

(4歳児 10月)

電車ごっこをしていた4歳児。

○H児：たくさん巧技台を並べる。

○A児：「通れんやん！あぶないよ！」

▲ クラスで話し合いの場を設ける。

○R男：「速く走れる方が楽しい。」

○A児：「転んだら危ない。」

○H児：「みんなが楽しい方がいいやん！」

電車ごっこのルールが決まる。

- ・ゆっくり走る。
- ・みんなが乗ってから進む。



視点②

自分なりに安全に気を付けて遊ぼうとしたA児。教師が話し合いの場を設けることで、クラス全体で安全に遊ぶ方法を考え、それに従って遊ぶようになった。

「階段作っとう！」

(5歳児 5月)

トンネル山にコースを作って、ゴルフボールを上から転がして遊んでいたA男。

○ 滑りやすい斜面を何度も登り下りしているうちに、「階段作っとう！」と、斜面をスコップで掘り、足場を作った。



視点②

繰り返し遊ぶ中で、自分や友達が滑って転ぶ経験から危険を予測し、対策を講じ、改善している。

凧揚げでの姿

(4歳児 1月)

○ 凧揚げをして遊んでいた年少児。

▲ 幼児たちが自分で安全に気を付けられるかどうかしばらく見守る。



視点②

最初は好き勝手な方向に走り回っていたが、自分たちなりにぶつからないように気を付け、同じ方向に走るようになった。

「少し遠いな」

(5歳児 9月)

巧技台でコースを作って、竹馬で渡っていたS男。

- (S男) 巧技台同士の距離を開け、より難しいコースを作る。
- (S男) 竹馬に乗って渡りながら、「少し遠いな」と、巧技台同士の距離を調整する。

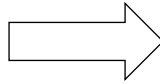


視点②

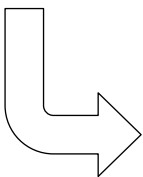
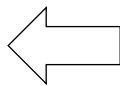
落ちずに自分の力で渡るための巧技台同士の間隔を予想→調整している。

「こっちで見とうけん大丈夫よ！」

(4歳児 9月)



Hちゃんあぶないよ！



▲ 自分たちで危険を予測し、回避しようとしているか見守る。

こっちで見とうけん大丈夫よ！

視点②

“危ないかもしれない”ということを見分けて自分たちなりに予測し、注意を促している。

視点②

友達からの注意を受け入れ、振り回す縄が当たらないように気を付けながら遊んでいる。

「しっかりとぎったらいいよ」

(5歳児 11月)

初めて木登りロープで遊ぶ、交流で遊びに来た他園の幼児たち。

- ロープが揺れるのを怖がる幼児に、
「しっかりとぎったらいいよ」と、やり方を教えるS児の姿が見られた。



視点②

普段から遊び込んでいるので、どのように遊んだら安全か把握し、それを初めて遊ぶ他の幼児に伝えている。

「ジャンプするよ〜！」

(4歳児 6月)

ライオン島から跳び下りて遊んでいた幼児たち。マットに残っている幼児に次の幼児がぶつかることがあった。

- ▲ 下にまだ幼児がいることに気付けるよう声掛けをした。
- それを見ていたN児。
「ジャンプするよ〜！」



視点②

教師のやり方を真似して、自分なりに安全に遊ぼうとしている。

「ここは大丈夫やもん」

(5歳児 5月)

ブランコに乗って遊んでいたT男。そこにH男がやってきて、柵の中でT男を見上げる。

- (T男)「H君、そこあぶないよ！」
- (H男)「ここは大丈夫やもん。」



視点②

ブランコがどこまでくるのか自分なりに把握し、そのスリルを楽しんでいる。

この「ここは大丈夫やもん」のエピソードにおけるH男のような姿を見かけると、教師は真っ先に「危ないよ!」、「柵の中から）出てきなさい!」と注意するのではないだろうか。もちろんH男だってそんなことは理解している。理解したうえで、「ここなら大丈夫」と自分なりに判断して遊んでいるのである。そのように考えると、H男は“安全についての構え”が身に付いていると言える。

“柵の中に入っちゃいけない”というルールを守っていないのはよくないが、頭ごなしにそれを注意してやめさせているのは、このような姿は育たないのかもしれない。今研究において、教師たちが考えさせられたエピソードである。